View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

『世界の日本語教育』16, 2006 年 8 月

コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究
――「とり～」を事例として――

松 田 文 子*, 白 石 知 代**

キーワード: **複合動詞，語彙習得支援，コア，コア図式，イメージ図式**

要　旨

日本語複合動詞は文法形式と語彙の両面の要素を持ち，日本語の語彙の中でも極めて重要な役割を果たすが，日本語を学ぶ者にとってその習得は容易ではないことが指摘されている．

本稿は，近年新しい意味提示の方法として提案されているコア（コア図式）を用いた複合動詞の習得支援の方向性と可能性を探ったものであり，事例として多義動詞「とる」を前項とする「とり＋後項動詞（V2）」を取り上げている．「とり＋V2」は「財布をとり出す」「ゴミをとり除く」のように「とり」に本動詞「とる」の意味がそのまま引き継がれているものと，「先生をとり囲む」「靴をとり揃える」のように「とる」の意味は希薄化しているようにみえるものがある．本稿では，このいずれの場合であっても日本語母語話者の「とり＋V2」の意味づけは本動詞「とる」のコアをベースになされていると仮定し，母語話者を対象とした調査データからこの点を明らかにした．具体的には，「囲む」と「とり囲む」のような「単純動詞」と「とり＋V2」の意味的差異に着目した調査をおこない，その結果から母語話者の「とり＋V2」の意味理解は「とる」のコアがさまざまな形で反映していることを示した．またこれと併せて非母語話者についても同様の調査をおこない，非母語話者は「とり＋V2」の意味をどのように捉えているかを観察した．その結果，非母語話者の捉え方には母語話者とは異なる特徴がみられた．

上記の結果を踏まえると，非母語話者が母語話者と「とり＋V2」の意味を共有するためには，「とる」のコアを介在させた意味理解が望ましいと考えられるが，コアは言語使用や学習を通して徐々に形成されるものである．そこで本稿では，時間的制約のためコアの内在化には困難を伴う非母語話者に対しては，自然な内在化を待つだけでなく，意識的なコアの内在化を助けるような支援ツールが必要であることを提案し，その支援の方向性を提示した．

1. は じ め に

語彙の指導に当たって教師は，細心の注意を払って語の意味の説明をし，対訳を示し，多くの

* MATSUDA Fumiko: 岡山大学教育学部専任講師.
** SHIRAISHI Tomoyo: 千葉大学国際教育センター非常勤講師.

例文を提示する．しかし，教師がいかに詳しく語の意味用法を提示しても，学習者の産出する文には教師の予測を超えた不自然な文や意味の通じない文が数多く含まれている．このとき，母語話者である日本語教師は事前に意識し得なかったその語の持つ複雑な意味特徴にはじめて気づかされることになる．日本語教育に携わるということは，日々，このような気づきの繰り返しであり，いかにベテランの日本語教師であろうと，全ての語彙の意味特徴を捉え，学習者の不自然な文産出を事前に予測し，回避することは不可能であろう．

膨大な input と output の中で培われた母語話者の言語直観は，このように語学教師の場合であっても，言葉にできるほど意識化されているものはごく一部にすぎない．しかし，語彙学習の目標が母語話者の言語直観に少しでも近づいていくことであるとすれば，指導者は意識化されていない言語直観の背後にあるものをできる限り明確に，かつ包括的に捉えておく必要がある．また母語話者に比べて input, output ともに限りがあり，習得時間に制限の想定される学習者の側から言えば，自然に母語話者のような言語直観が培われるのを待つだけでなく，これを明示的に示すツールが求められる．

こうした背景から近年，多義語の習得支援に「コア図式論」を用いる方法が提案されている（田中 2004，松田 2004）．「コア図式論」についての詳細は後述するが，簡単に言えば，母語話者の持つ言語直観の背後にあるものをコア（「概念イメージ」）として捉え，それを一つの認知図式（コア図式）にあらわして説明しようとするものである．この方法の利点として，一つひとつばらばらに点として理解していた多義語の意味を一つの図式のバリエーションとして包括的に理解できることや，隣接語との意味的差異もコアの違いによって説明できるようになることが指摘されている（松田・白石 2005）．しかしながら日本語教育において，この方向での研究はまだ緒に就いたばかりであり，語彙習得支援の観点から具体的な語彙項目を取り上げた研究は，管見の限りでは，松田（2004），松田・白石（2005）などわずかである．

本稿はこれらに続くものとして，語彙の中でも習得の難しいことが指摘される複合動詞（姫野 1999，松田 2004）を研究対象とし，コア図式を用いた語彙指導および語彙習得支援の方向性と可能性を論じるものである．

2. 研 究 対 象

本稿では，複合動詞の中で多義動詞「とる」を前項動詞とする複合動詞「とり～」（以下「とり＋V2」と記す）を研究対象として取り上げる．国立国語研究所の調査（1987，野村・石井他『複合動詞資料集』）によると，本稿で取り上げる「とり＋V2」は，「とり出す」「とり集める」「とり忘れる」など 60 数項目が報告されており，「とる」は生産的な複合動詞前項である．学習者にとってこの意味習得が容易でないと予測されるのは，これらを意味面からみると，前項動詞「と

り～」と後項動詞の結合の仕方が一様ではないためである．例えば「おもちゃをとり上げる，魚をとり尽くす，痛みをとり去る」のように複合動詞になっても本動詞「とる」の意味がそのまま引き継がれているものがある一方で，「先生をとり囲む，入学式をとり行う，店をとり仕切る」など接頭辞とされているもの[1]や「犯罪をとり締まる，課題にとり組む，気持ちをとり乱す」のように本動詞「とる」の意味は希薄化しているものがある．本稿は，これらの「とり」にはいずれの場合であっても本動詞「とる」の意味がさまざまな形で反映していると仮定するものであり，本稿の目的は，本動詞「とる」の意味が多義的な「とり＋V2」の意味にどのように反映しているかを単純動詞との比較において考察を試みることである．

以下，**3.** では松田（2006 掲載予定）の提示した「とる」のコア図式について述べ，**4.** では母語話者を対象に単純動詞と「とり＋V2」の差異に着目した調査をおこない，その結果から，母語話者の「とり＋V2」の意味理解は「とる」のコアをどのように反映しているかを示す．併せて非母語話者についても同様の調査をおこない，非母語話者は単純動詞と「とり＋V2」の差異をどのように捉えているかを観察する．最後の **5.** では **4.** の考察を踏まえて，語彙習得支援への方向性と今後の課題について述べる．

3. 先行研究:「とる」の意味

「とり＋V2」における「とり～」の多様な意味が「とる」のコアの反映だと考えるためには，本動詞「とる」のコアは何かを明らかにしておくことが必要である．本章では，松田（前掲）の提示した「とる」のコアと，コアに基づく「とる」の分析（の一部）を概観する．

3–1. 理論的背景:「コア図式論」

意味記述の方法として松田は「コア図式論」を援用している．「コア図式論」は田中（1990）によって提唱された理論であるが，ここで筆者らなりの理解を述べておくと，以下のようにまとめることができよう．「コア図式論」では，母語話者はある現象とある語とを直観によって結びつける能力を有しており，それを可能ならしめるものが当該語に対して持つコア（概念イメージ）であるとする理論的立場に立つ．コアは当該語の意味範囲全体を包摂する概念イメージであるが，それは母語話者が言語使用や学習を通して内在化しているイメージであって，母語話者自身であっ

[1]『大辞林　第二版』によると，「とり急ぐ，とり行う，とり囲む，とり片付ける，とり交わす，とり決める，とり壊す，とり捌く，とり仕切る，とり調べる，とり澄ます，とり揃える，とり散らかす，とり繕う，とり計らう，とり紛れる，とり混ぜる，とりまとめる，とり結ぶ」の 19 語における「とり～」は接頭辞として記述されている．これらが接頭辞であるか否かについては議論の分かれるところであるが，本稿は接頭辞か否かを議論するものではないので，立ち入ることは差し控える．

ても通常意識されることはない．こうした潜在意識下にあるコアを研究者が多くの用例の分析と統合を通して顕在化し，それを可視的に図式にあらわしたものが「コア図式」である．コア図式は当該語の意味を「ゲシュタルトとして捉えた認知図式」であり，その図式にさまざまな「認知的力点」[2] を置くことによって，語の多義を説明しようとするのが「コア図式論」による意味記述の手法である．

3–2. 「とる」のコア

では，「とる」のコアはどのように捉えられるであろうか．すぐ思いつく「とる」の動作は「彼女は，大皿からサラダを小皿にとった」や「彼女は，テーブル上の邪魔な花瓶をとった」のように「元ある場所」から「別の場所」に対象を移す動作である．このことを図式に示せば，次のようになる．（網がけの四角は「とる対象」をあらわす．以下，同様．）

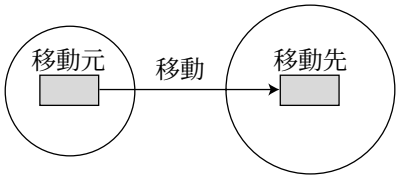


図 1 「とる」

しかしこの図式では，第一に「舵をとった」や「バランスをとった」のように移動元も移動先もない用法の説明ができない．第二に，「とる」の使い分けに関わる次のような用法の説明ができない．通常，捕獲の意味で「魚をとる」「ウサギをとる」とはいうが，「猿をとる」「亀をとる」とはいいにくい．これは，猿や亀を捕獲して食用や毛皮などに用いる状況が日本文化では喚起しにくいためであると考えられる．また，「熊をとる」というのは通常，鉄砲で撃つなどして殺すことをあらわすが，熊が人や作物に被害を及ぼすので射殺するという場合は「熊をとる」とはいわない．つまり「熊をとる」といえるのは，熊を射殺するだけでなく，その後「毛皮などに利用する」という意味を含んでいる場合のみである．松田は以上の点を考慮して，「とる」のコア図式を図 2 のようにあらわしている．

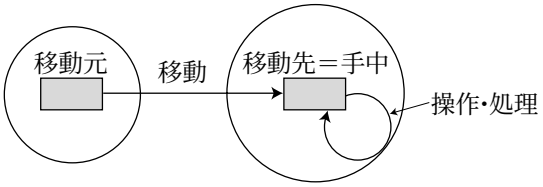


図 2 「とる」のコア図式

[2] 認知的な力点というのは，一つの図式のある部分が「焦点化・前景化」することを指す．焦点化されない残りの部分は「背景化」するか，「認知外」となる．

① 「移動元」は，対象(網がけ四角)が「元ある場所・状況」である．

② 「移動」とは，何らかの手段で意図・状況に適うように「対象を移す」ことである．「何らかの手段」とは，「手，箸，網，カメラ，コピー機，薬(品)」などで，手段のプロトタイプは「手で」であると考えられる．

③ 「移動先」は，対象が移動した場所・状況である．「手中」とは，主体が「対象を扱えるところ，利用できるところ」という意味での「心理的な手中」である．移動先は「どこか別の場所」のこともあるし，「手中」と呼べる空間のこともある．

④ 「操作・処理」は，対象を状況に適うように「操縦する」「調整する」「操る」「処理する」などの「扱う」動作，あるいは「活用する」「利用する」というような言葉であらわされる行為を総括してあらわすものである．

上述したように，コア図式はゲシュタルトとして捉えた認知図式であり，文脈上の具体的な意味ではない．比喩的にいえばコア図式は，インクのしみの見え方が角度によって異なるように，文脈・状況によってさまざまな「見え姿」がある．

では，図 2 のコア図式から「とる」の多義性はどのように説明できるであろうか．「とる」分析の詳細は松田(前掲)をご参照いただきたいが，「とる」の「見え姿」はコア図式の「移動元，移動，移動先，操作・処理」のいずれかに認知的力点を置くこと(以下，「焦点化」と記述する)によって生じる姿であり，この文脈・状況によって変化するコア図式の「見え姿」をコア図式論では「イメージ図式」と呼んでいる．

ここで本稿と関連がある幾つかの用例とそのイメージ図式を挙げると，次のようになる．例えば「帽子をとって，挨拶する．」という用法は，「対象を移動元からなくすこと」に焦点がある用法であるとして，「移動元」と「移動」が焦点化された以下のようなイメージ図式を提示している．点線は背景化あるいは認知外(「地」に埋没)であることをあらわす．

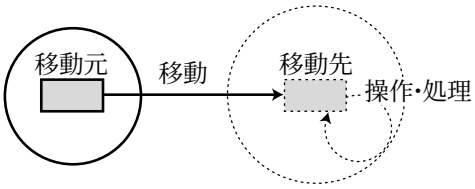


図 3 「帽子をとる」のイメージ図式

「山できのこをとった．」という用法は，対象を単に手中にする・わがものにするだけでなく，「何らかの処理をするものとして手中にする」という認知が働いた用法であるとして，「移動」と「移動先(＝手中)」が焦点化し，さらには「操作・処理」も含意される図 4 のようなイメージ図式を提示している．そして「狩猟，漁，採集」などで「とる」場合は元々この意図があり，「とる」

の典型的な用法であろうと述べている．またこのように捉えることで，「つかまえる」との意味的差異も明らかになるとしている[3].

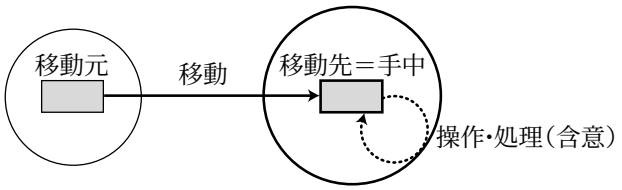


図 4 「きのこをとる」のイメージ図式

また「彼は嵐の中で必死に船の舵をとった.」という用法は，「すでに移動先(＝手中)にある対象」に着目して，取り込んだものを手中で動かす(＝操作・処理)用法であり，意図・状況に適うように対象を扱う(＝操作・処理)ことに認知的焦点を当てた用法であるとして，「操作・処理」が焦点化した図 5 のようなイメージ図式を提示している．この用例において移動性は殆ど認知されない.

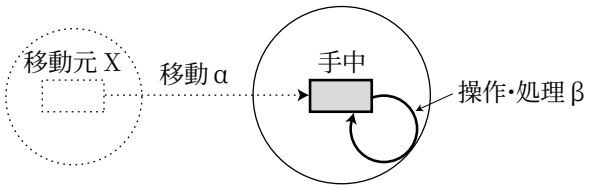


図 5 「船の舵をとる」のイメージ図式

以上，三つを事例として「とる」のコア図式に焦点化操作の加わったイメージ図式を示した．「とる」のコア図式の焦点化箇所の組み合わせは複数あり，原理的には「とる」のイメージ図式は文脈・状況によりいくつでも描くことができる．因みに松田(前掲)では代表的なものとして六つのイメージ図式が描かれている.

以上，「とる」のコア図式およびいくつかのイメージ図式を挙げた．では，「とり＋V2」の意味に「とる」のコアはどのように反映しているであろうか．それを確かめる方法として，本稿ではいくつかの「とり＋V2」の項目を取り上げ，日本語母語話者を対象とした調査をおこない，単純動詞を用いた文と，複合動詞「とり＋V2」を用いた文を比較したときに，どのような差異があらわれるかに着目した．その文脈・状況の差異は，母語話者が内在化している「とる」のコアが反映しているものと考えたからである．さらに，この調査では併せて非母語話者についても同様の調査をおこなった.

[3]「とる」と「つかまえる」の意味的差異については，松田・白石（2005）も参照されたい.

4. 調　　査

4–1. 調査の方法

質問紙に単純動詞を用いた文と複合動詞を用いた文を提示し，調査対象者にニュアンスの違いを記述するよう求めた．調査期間は 2005 年 3 月である．調査項目は以下の 5 項目を用いた．
①「ドアチェーンを外した」「ドアチェーンをとり外した」 ②「洗面台を壊した」「洗面台をとり壊した」 ③「靴を揃えた」「靴をとり揃えた」 ④「学生が先生を囲んだ」「学生が先生をとり囲んだ」 ⑤「外出を止めた」「外出をとり止めた」

項目の選定に当たっては，「とり～」の意味を浮き彫りにするため，「V2」だけを単純動詞として用いることも可能であるが，単純動詞を用いた場合と，複合動詞を用いた場合とでは異なる状況を想定することが予想される事例を選出した．

4–2. 調査対象者

日本語母語話者（以下母語話者）20 名と，日本語非母語話者（以下非母語話者）20 名を対象に調査をおこなった．母語話者は日本語教師経験者と非経験者を含む．非母語話者は日本語能力検定試験 1 級に合格し，その後 1 年以上日本の大学，大学院，企業などに所属している，いわゆる日本語学習の上級者とみなされる者である．

4–3. 調査結果と考察

4–3–1. 母語話者の結果の考察

表 1 は，調査結果をまとめたものである．分析にあたっては，単純動詞と複合動詞の異なりをどのように捉えているかをみるために，両者の理解の組み合わせで分類した．また，一人の調査対象者が複数の意味を記述した場合には，複数回答として計数しているので，合計数は必ずしも調査対象者数とは一致しない．本節ではまず母語話者の結果について，「とる」のコアがそれぞれの「とり～」にどのように反映しているかを「とる」のコア図式（**3.** 図 2）に基づいて考察する．

表 1 「ドアチェーンを外した」と「ドアチェーンをとり外した」

組み合わせタイプ（以下タイプ）	ドアチェーンを外した	ドアチェーンをとり外した	母語話者	非母語話者
A	施錠しているものを開けた	本体をドア自体から撤去・除去した（新しいものに取り替えるため 7，道具を使って 3）	20	9
その他（学習者のみ）外した/とり外した	力不要/力を入れて（4）目的なし/目的あり（2）ただ外した/強調した（2）計画あり/計画なし（1）動作に注目/動かされている（1）ある所から分離した/穴から分離した（1）			

（**母語話者の結果の考察**）

母語話者は全員，「ドアチェーンを外す」は「開錠」であるとし，「ドアチェーンをとり外す」は「ドア自体から除去・撤去」としている．この結果を「とり＋V2」には母語話者が内在化している「とる」のコアが反映しているとする筆者らの仮説に照らして考察すると，「とり外す」を「ドア自体から除去・撤去」としたのは，「とる」行為が「対象（の一部ではなく全体）を移動する」ことであり，「とり外す」は「とる」のコア図式の「対象をその場からなくす」という側面が焦点化した用法（イメージ図式 1）として了解しているといえる．すなわち，「とり外す」は「とり」が付加されるために，対象を「ドア自体から」「引き離す」ということになる．一方，単に「外す」はドアチェーンを引っ掛けている「フックから」というように「移動元」が異なる．従って「とり外す」は「とる」のイメージ図式 1 と「外す」を合わせたものとして，図 6 のように描くことができる（白抜き四角はドア，斜線四角はドアチェーン，黒丁字はネジ）．

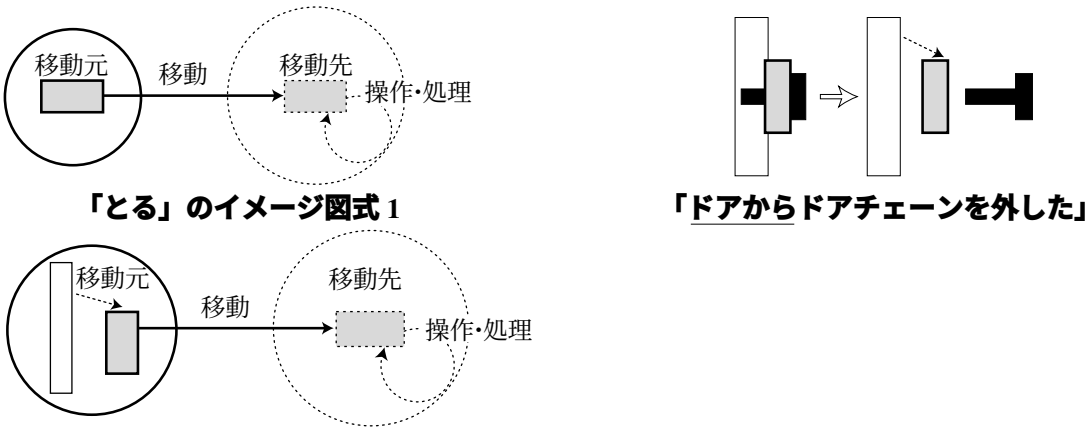


図 6 「ドアチェーンをとり外した」（ドアからドアチェーンを外して，撤去した）

「とり外す」が簡単に着脱できる「眼鏡，指輪」などを対象に「＊眼鏡をとり外す」「＊指輪をとり外す」とはいえないのは，「とり外す」対象は，一般的には「とり付けているもの」であるからである．「眼鏡をとり外す」という表現から喚起されるのは，ロボットにネジなどで固定した眼

鏡を外すような状況である．すなわち「とり外す」はそのままでは他の場所へ移すこと(「移動」)が難しい対象を「とる」あるいは「外す」のであり，対象をとる際，「ねじを外す」など何らかの処理を必要とする．母語話者 3 名が「道具を使って」と述べたのは，この点に言及したものであると解釈される．

表 2 「洗面台を壊した」と「洗面台をとり壊した」

タイプ	洗面台を壊した	洗面台をとり壊した	母語話者	非母語話者
A	一部が欠損した	全体を撤去した	12	1
B	意図は問わない(意図なし含む)	意図的に撤去した	6	9
C	意図は問わない	全体を撤去	2	0
D	単に壊した	力を加えて壊した	1	0
その他 (学習者のみ) 壊した/とり壊した	単に壊した/とってから壊した(2) 悪意で壊した/修理のために壊した(1) 一部を壊した/徹底的に使えない状態にした(1) 単に壊した/理由があって壊した(1) 単に壊した/外すとき壊した(1) 単に壊した/離れるほど壊した(1) 普通/強調(1) ぐちゃぐちゃに壊した/根っこから壊した(1) ひどく壊した/蛇口を壊した(1)			

(母語話者の結果の考察)

母語話者の反応を大別すると，「とり壊す」に対し「① 全体を撤去」としたものが 14 名，「② 意図的」としたものが 6 名である．「① 全体を撤去」は，「とる」行為が「対象(の一部ではなく全体を)移動する」ことを含意していることの反映であり，「② 意図的」は，「壊す」は意図的な場合だけでなく「うっかり花瓶を壊してしまった」のように，非意図的な場合も含むが，「とる」は意志的行為のみをあらわすという点が反映していると考えられる．本結果を筆者らの仮説に照らし合わせてみると，母語話者は「とり壊す」を，「とり外す」の場合と同様に，「とる」のコア図式の「対象(の一部ではなく全体)をその場からなくす」という側面が焦点化した用法(イメージ図式 2 = イメージ図式 1 再掲)であると了解しているといえる．

ところで，われわれは「とり壊す」は通常建物などにしか用いられず，眼鏡やおもちゃのようなものには用いられないという直観を持っている．なぜなのだろうか．「対象物をその場からなくす」ことをあらわしたいとき，「とる」を用いて，例えば「眼鏡をとった」という表現をするが，このとき対象物となり得るのは，「手でとれる」と想定される範囲のものに限られる．簡単に手でとれないものをなくしたいときは，「とる」とはいいにくい．ネジなどを外して撤去する必要があるときには「とり外す」，固定してあり，壊さないと撤去できないものである場合は「とり壊す」のように，どのように「とる」のかを付加することによって表現する．つまりわれわれが「とり壊す」という表現を用いるときは，対象物を「簡単にはとれない」ものであると想定している．従って，「鏡を壊した」は手鏡などの場合でも用いることができるが，「鏡をとり壊した」という表現から喚起されるのは，壁にしっかりと固定された鏡をとり除くような状況である．

このように，「とり壊す」対象は「壊さないと，全体を他の場所に移すことができないもの(撤

去・除去できないもの)」が対象となり，そのため，一般的には大掛かりな撤去をあらわすことになる．「とり壊す」は「壊す」と「とる」のイメージ図式 2 を合わせた図 7 のようにあらわすことができる．

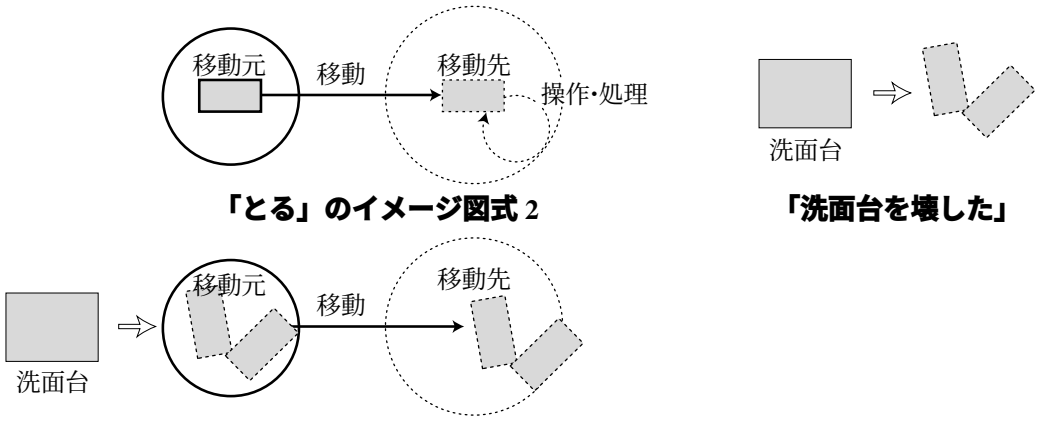


図 7 「洗面台をとり壊した」

表 3 「靴を揃えた」「靴をとり揃えた」

タイプ	靴を揃えた	靴をとり揃えた	母語話者	非母語話者
A	一足ずつ方向を整えた	目的があって複数準備した	13	4
A′	一足ずつ方向を整えた	複数準備した(靴屋・店)	7	0
その他 (学習者のみ) 揃えた/とり揃えた	方向を整えた/とって揃えた(4) 一足だけ方向を揃えた/複数種集めた(3) 結果重視/揃える前に工夫した(1) 結果重視/苦労して揃えた(1) ただ揃えた/多くの靴を揃えた(1) ただ揃えた/必要な靴を購入した(1) 玄関の靴を揃えた/家中の靴を集めて並べた(1) ただ揃えた/積極的な行為(1) 片方なかったが見つかった/玄関の靴を整理した(1) 分からない/分からない(1)			

(母語話者の結果の考察)

母語話者は全員，「靴を揃える」に対して「方向を整える」とし，「とり揃える」を「目的があって複数準備」としている．「とり揃える」に「目的があって」と感じるのは，「とる」のコア図式の「対象を手中に移した後」「それを扱う」という側面が焦点化した用法(イメージ図式 3)であると了解しているからであると解釈される．「目的があって複数準備」とした人のうち 7 人は，「靴屋，店で」と仕事として靴を扱うことに言及しているが，これは「とり揃える」に「扱う」ことが含意されることをより明示的に表現したものである．では「複数準備」というニュアンスはどこからくるイメージであろうか．「靴を揃える」は，玄関など「その場でばらばらになっている靴」の方向を整えるのであり，「靴をとり揃える」は，「とる」に移動性があるため「その場に無い靴をどこかから持ってくる」という意味が付加される．また「揃える」には「方向を整える」

以外に，「人数を揃える」のように「集める」という意味があり，「集める ⇒ 複数」というイメージが拡がっていく．これらのことから，「靴をとり揃える」は「移動元(問屋など)から複数の靴を手中にして，それを商売として扱う」というイメージを喚起させるものと考えられる．このように考えると，「とり揃える」は「とる」のイメージ図式 3 と「揃える」を合わせたものとして図 8 のようにあらわすことができる．

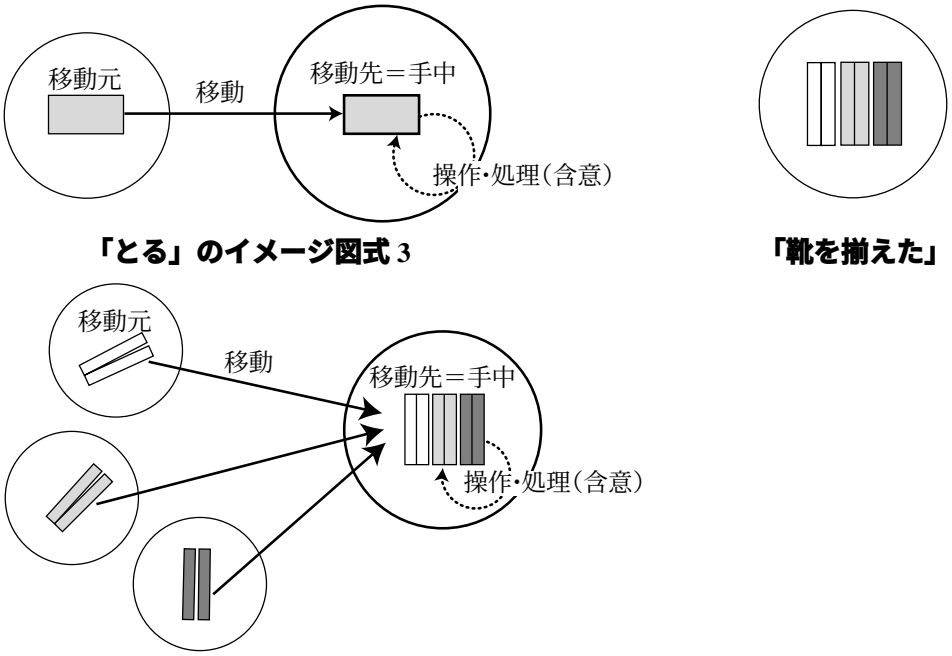


図 8 「靴をとり揃えた」

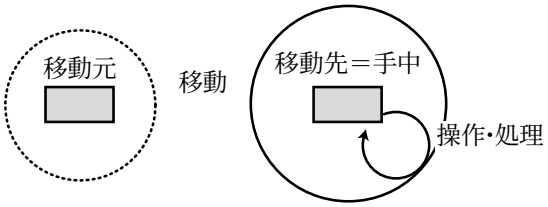
表 4 「学生が先生を囲んだ」「学生が先生をとり囲んだ」

タイプ	学生が先生を囲んだ	学生が先生をとり囲んだ	母語話者	非母語話者
A	穏やか・団欒・和やか	抗議などをするため	11	2
B	意図・目的なし	抗議・訴えるなど意図・目的あり	5	5
C	距離感は問わない	距離は接近	1	0
D	人数は問わない	人数が多く隙間がない(集団的)	1	3
E	団欒	空間なし	1	0
F	先生に挨拶している	先生を胴上げするため	1	0
その他(学習者のみ) 囲んだ/取り囲んだ	ただ囲んだ/感謝・お祝い・先生を上に(3) 丸く囲んだ/秩序よく囲んだ(1) ただ囲んだ/くるっと囲んだ(1) 分からない/分からない (5)			

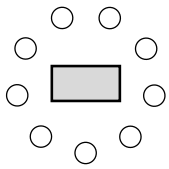
(母語話者の結果の考察)

母語話者の反応を大別すると，「とり囲む」に対し「抗議・胴上げなど囲んだ後の行為」に着目した人が 16 人，「囲んだ距離(隙間なし)」に着目した人が 3 人，「人数が多い」と回答した人が

1 人である．「抗議」は学生と先生という関係から引き出される行為であり，その後の行為は「胴上げや取材」などでもよいが，「とり囲む」に「囲んだ後の行為」をイメージするのは，「とる」は「対象を手中にして」「それを扱う」という側面が焦点化した用法（イメージ図式 4）であり，「とり囲む」は「その後の行為のために囲む」ことと了解されていると考えられる．この場合，前述の「とり揃える」と違うのは，「移動元から手中へ」という移動性は希薄になっている点である．また「隙間なく囲む」「人数が多い」というイメージは，「その後の行為のために」，「中に取り込んだ対象が外に出られないようにする」という側面に着目した回答であると解釈される．このように考えると，「とり囲む」は「とる」のイメージ図式 4 と「囲む」を合わせた図 9 として記述できる．



「とる」のイメージ図式 4



「学生が先生を囲んだ」

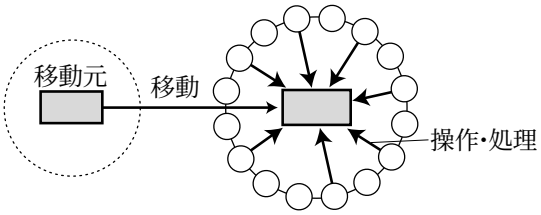


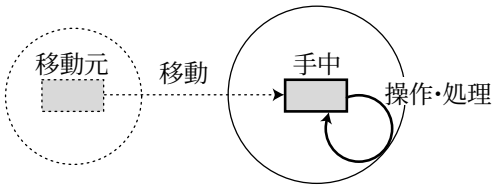
図 9 「学生が先生をとり囲んだ」（白丸は学生，斜線四角は先生）

表 5 「外出を止めた」「外出をとり止めた」

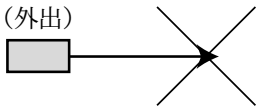
タイプ	外出を止めた	外出をとり止めた	母語話者	非母語話者
A	本人の意思	余儀なくされた	5	5
B	予定なしの外出	予定（計画）ありの外出	10	6
C	日常的な外出	非日常的な公的な外出	5	0
D	自分だけの予定	他の人も知っている（影響を与える）	5	1
E	急遽止めた	前もって止めた	1	0
その他 （学習者のみ） 止めた/とり止めた	意思不問/自分の意思でやめた（2）予定していた外出をやめた/慎重に考えて止めた（1）変更して外出しなくなった/急遽止めた（1）自分の意思で止めた/外出するルールを廃止した（1）外出を止めた/予定の中からある外出を選んで止めた（1） わからない/わからない（3）			

（母語話者の結果の考察）

母語話者の「とり止める」に対する反応は，予定(計画)のある外出，非日常的な公的な外出，誰もが知っている外出など「外出の性質」について言及した人が 15 人，中止を余儀なくされたなど「他者との関係」に言及した人が 10 人である．これらはいずれも中止をすれば他者に影響を与えることを意味しており，「とり止める」はただ止めるだけでなく，「諸々の手続きや処理をおこなって中止する」というニュアンスを含んでいると解釈され，母語話者は「とり止める」における「とる」をコア図式の「対象を処理すること」が焦点化された用法(イメージ図式 5)として了解していると考えることができる．一方，「外出を止めた」は外出という行為を「外出しようと思っていた」「外出の準備をしていた」「外出しかけた」などのいずれかの時点で中止するという意味をあらわしている．従って「とり止める」は「とる」のイメージ図式 5 と「止める」を合わせた図 10 としてあらわすことができる．



「とる」のイメージ図式 5



「外出を止めた」(手続きは不要の中止)

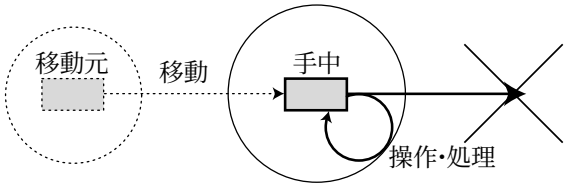


図 10 「外出をとり止めた」(諸々の手続きをおこなって中止)

以上，5 項目の「とり＋V2」において「とる」の意味要素がどのように反映しているかを「とる」のコア図式に基づいて考察した．本調査は「とり＋V2」の一部の項目を扱ったものであり，しかも限定された文脈ではあるが，本調査の結果を踏まえると，母語話者は「とり＋V2」に対して類似したイメージを形成していることが明らかになった．そしてそのイメージは，本動詞「とる」のコア(概念イメージ)がさまざまな形で反映したものとして解釈される．ただし，「とり」と「V2」の意味の相互作用のあり方は一様ではなく，時間的な要素がどのように反映されているかは，それぞれの複合動詞によって異なる．

4–3–2. 非母語話者の結果の考察

今回の調査結果から，非母語話者の単純動詞と「とり＋V2」の差異についての意味理解には，母語話者とは異なったいくつかの特徴が観察された．その一つは，母語話者が単純動詞と「と

り＋V2」の差異について形成する概念イメージはまとまったものであったのに対して，非母語話者の理解には非常にばらつきがみられたことである．例えば，「外す」と「とり外す」の差異を母語話者は全員が「開錠」と「撤去」の差異として捉えているのに対して，同様に答えた非母語話者は9名で，その他半数以上が「力不要」と「力を入れて」（3名），あるいは「目的なし」と「目的あり」（2名）などのように，様々なイメージで差異を解釈していた．「壊す」と「とり壊す」の差異については，母語話者と同様の解釈をした非母語話者は半数で，あとの半数は「単に壊した」と「とってから壊した」（2名），「一部」と「徹底的に使えない状態にした」（1名）などのように，やはりバラバラの解釈をしている．この点は全ての事例について同様の傾向がみられた．

非母語話者の2番目の特徴は，「とり＋V2」を「とってからV2」と解釈することが多く，「とってから壊した」，「とってから揃えた」「とってから止めた」と捉えていたことである．非母語話者はプロトタイプ的な「とる」をイメージし，そのプロセスに単純動詞の意味を付加して理解していることが推測される．

3番目の特徴は，今回調査対象としたような日本語学習の上級者になると，「とる」の概念イメージはかなり形成されていることがうかがえるのだが，母語話者のようには概念イメージが広がらない，という点である．例えば，「囲む」と「とり囲む」については，母語話者の半数が「穏やか」と「抗議」という対比で捉えているのに対し，このようなイメージを形成した非母語話者は2名で，むしろ「とり囲む」に感謝やお祝いの雰囲気を感じると答えた非母語話者が3名いた．「揃える」と「とり揃える」の差異については，母語話者のように「靴屋」に言及した者もいるが，イメージは「靴屋さんが靴箱からとって，店先に揃えている」というものであった．ここから，やはりプロトタイプ的な「とる」のイメージから抜け出せていないことが推測される．

4番目の特徴は，今回の調査対象をいわゆる日本語学習の上級者としたにもかかわらず，差異について「分からない」と回答した非母語話者が多かった点である．調査対象者の一人が「今回の調査でおこなったような，単純動詞と複合動詞との差異を学習する機会はこれまでなかった」と述べた通り，このような差異について明示的な説明を受けることは難しく，単純動詞と「とり＋V2」の差異を明確に捉えるのは容易ではないことが推測される．

5. おわりに——語彙習得支援に向けて——

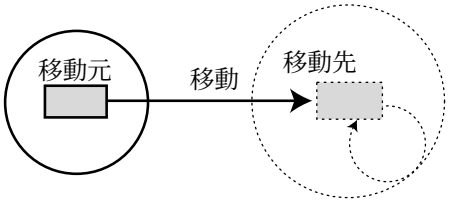
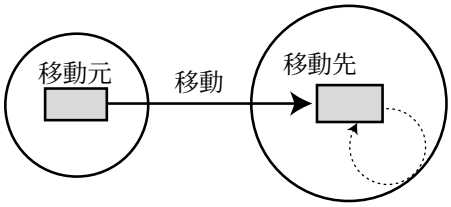
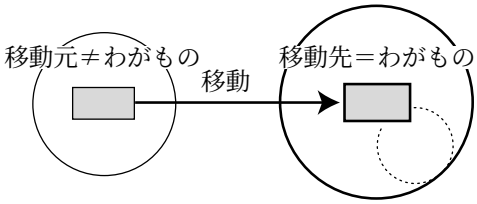
目標言語での円滑なコミュニケーションのためには，言葉の意味づけを母語話者と共有することが必要である．このためには個々の意味づけの背後にある当該語に対するコア（概念イメージ）がどのようなものであるかを知ることが必要となる．

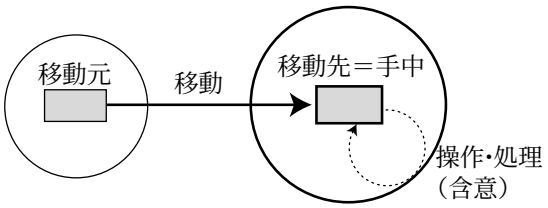
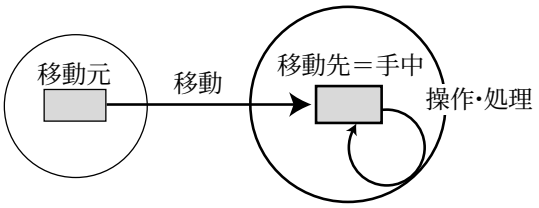
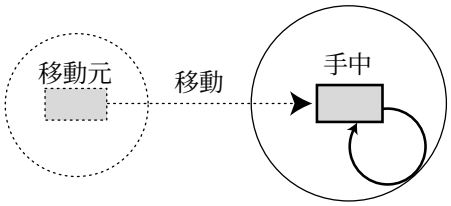
本稿では松田（掲載予定）で提示された「とる」のコア図式を母語話者が内在化しているコア（概念イメージ）を顕在化した図式として受け入れ，コア図式を用いて母語話者の捉える「とり＋V2」

の意味は，「とる」のコアがさまざまな形で反映しているものとして説明した．今回の考察で示したように，母語話者の「とり＋V2」の意味理解が，「とる」のコアをさまざまな形で反映したものであるとすると，非母語話者が「とる」のコアを知り，コアの焦点化によって「とり＋V2」の意味を理解できるような習得支援の方法が母語話者の概念イメージに近づく有効な一つの手段になりうると考えられる．

しかしながら今回は非常に限られた項目しか扱っておらず，コア図式を介在させた教師と学習者へ向けた具体的な語彙支援ツールの開発のためには，次のような具体的な課題が残されている．例えば，表 6 は松田（前掲）であらわされた焦点化の違いによる「とる」の六つのイメージ図式を「とり」に敷衍して仮提示したものである．ここでは多様な「とり＋V2」を「とり」の意味によって分類し，「とる」のイメージ図式に当てはめて，それぞれどこが焦点化しているのかを示した．（図の実線太字は「とる」のコア図式（図 2）の焦点化箇所をあらわし，点線は背景化箇所をあらわしている．）

表 6　前項動詞「とり～」の用法（網がけは 4. の調査項目）

前項動詞「とり～」の用法	事例
用法 A:「対象を元あった場所からなくすこと」に焦点がある用法  	1. ドアチェーンをとり外す 2. 洗面台をとり壊す 3. テーブルの覆いをとり払う 4. 岩をとり除く 5. 患者の痛みをとり去る
用法 B:「対象を別の場所に移すこと」に焦点がある用法  	1. 大皿のサラダを小皿にとり分ける 2. ポケットからハンカチをとり出す 3. 色とりどりの毛糸をとり合わせる 4. 大きいのと小さいのをとり混ぜる（もともと自分のもの）
用法 C:「対象をわがものにすること」に焦点がある用法  	1. 天窓から部屋に明かりをとり入れる 2. 身体に栄養をとり込む 3. 犯人をとり逃がす 4. パンフレットをとり忘れる

用法 D:「対象を手中に移すこと」に焦点がある用法.「操作・処理」が含意される.  	1. 靴をとり揃える 2. タイム誌をとり寄せる 3. 票をとり集める 4. 意見をとり入れる **「後で扱う（操作・処理する）」ものとして手中にする.**
用法 E:「対象を手中に移して扱うこと」に焦点がある用法. このことから動的対象を逃がさないというニュアンス.  	1. 学生が先生をとり囲む 2. 警官が犯人をとり押さえる 3. ファンがアイドルをとり巻く 4. 容疑者をとり調べる 5. スピード違反をとり締まる **「後で扱う」ものとして手中にする.**
用法 F:「手中にある対象を扱う（操作・処理）こと」に焦点がある用法  	1. 外出をとり止める 2. 儀式をとり行う 3. 首脳会談の日程をとり決める 4. 品物をとり捌く 5. 仕事の現場をとり仕切る **諸々の手続き（操作・処理）をして，V2 する.**

ここでは全ての「とり＋V2」を扱うことはできなかったが，今後このような形で，六用法以外のイメージ図式の可能性も含めて，すべての「とり＋V2」を整理していくことが必要である．その際，どのような V2 と共起するとき，「とる」のコア図式のどこが焦点化されるのかといった「焦点化のルール」に関する明確な言語的基準を，V2 の意味タイプなどを手がかりに見出していくことが重要な課題となる.

付　記

本研究は，科学研究費補助金の助成を受けた研究（基盤研究（c）（2）: 課題番号 16520320 研究代表者松田文子）の一部としておこなったものである.

参 考 文 献

田中茂範（1990）『認知意味論――英語動詞の多義の構造――』，三友社出版.
――――（2004）「基本語の意味のとらえ方――基本動詞におけるコア理論の有効性――」『日本語教育』121 号，3–13.

野村雅昭・石井正彦（1987）『複合動詞資料集』，国立国語研究所報告書.
姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』，ひつじ書房.
松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究――認知意味論による意味分析を通して――』，ひつじ書房.
松田文子・白石知代（2005）「多義動詞『とる』の意味――隣接語との差異に着目して――」『人間文化論叢』第 7 巻，409–419，お茶の水女子大学人間文化研究科.
松田文子（2006）「コア図式を用いた多義動詞「とる」の認知意味論的説明」『日本語科学』19 号，国立国語研究所.